第 23 回企画展 展示図録

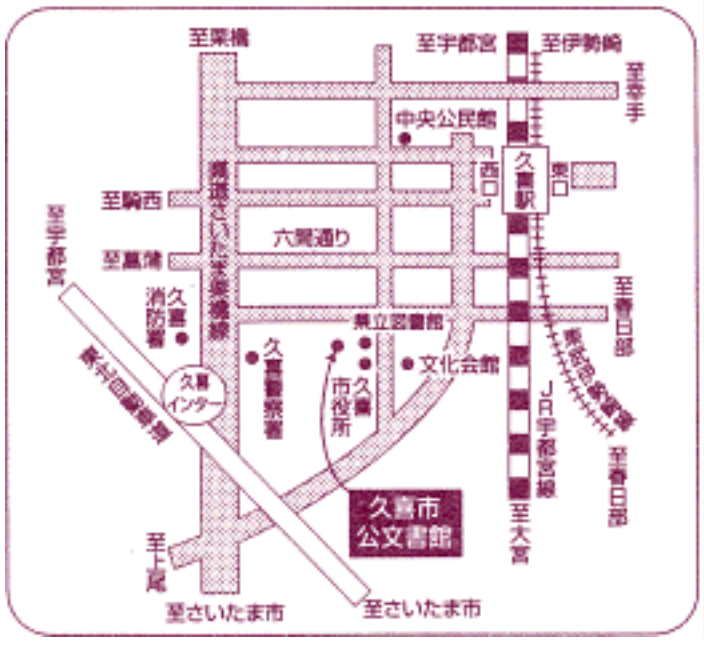
中島撫山「駿聲」

公文書館所蔵資料でみる

書の世界

亀田鵬斎（ほうさい）・亀田綾瀬（りょうらい）・亀田鶯谷（おうこく）・中島撫山（ぶざん）・中島端蔵（たんぞう）・
中島竦之助（しょうのすけ）・宮島詠士（えいし）・楊 守敬（よう しゅけい）・康 有為（こう ゆうい）ほか

H21.8.25 (火) ～H21.10.30 (金)



●開館時間：午前９時～午後５時　●入館無料

●休館日：土曜日・祝日(日曜日は観覧できます)

■久喜市下早見８５-１（市役所西側）　TEL0480-23-5010

URL　http ://www.city.kuki.lg.jp/info/koubunsyo/index.html

■交通案内：ＪＲ宇都宮線・東武伊勢崎線　久喜駅西口下車徒歩１７分

過去に学び未来を見つめる　久喜市公文書館

企画展「公文書館所蔵資料でみる書の世界」を開催するにあたって

この度、二十三回目を迎える久喜市公文書館の企画展として、「公文書館所蔵資料でみる書の世界」を開催いたしました。

書というものが、筆などを用いて文字を書くということと同じ意味と解しますと、ほぼ全ての市民の皆さんが、書というものを既に体験されていて、非常に身近な存在として書というものを理解できるものと思います。

しかしながら、最近ではコンピュータの普及等も影響しているのか、なかなか筆を持つ機会も減ってきて、結婚式の記帳等でも、筆ではなくサインペンが置かれていたりすると、なぜかホッとした経験もあるのではないでしょうか。

それでも、新しく本市に転入されてきた方とお話をしますと、「久喜市には、なぜ、こんなに書道教室が多いのですか」などという、古くから地元に住んでいるものにとっては思いもかけないお話をお伺いすることがあります。

こんなとき、私は、子どものころに親から聞かされた「読み・書き・そろばん」というものの伝統が、まだまだ久喜市には残っているのかななどと、ちょっとうれしい気持ちになるわけです。

もちろん、単に古いものが良いということをいうつもりではないわけで、日本でも、中国でも、書というものの背景には、書者の学識・教養といったものが常にセットになっているという点で、書というものは非常に奥も深いものでございます。

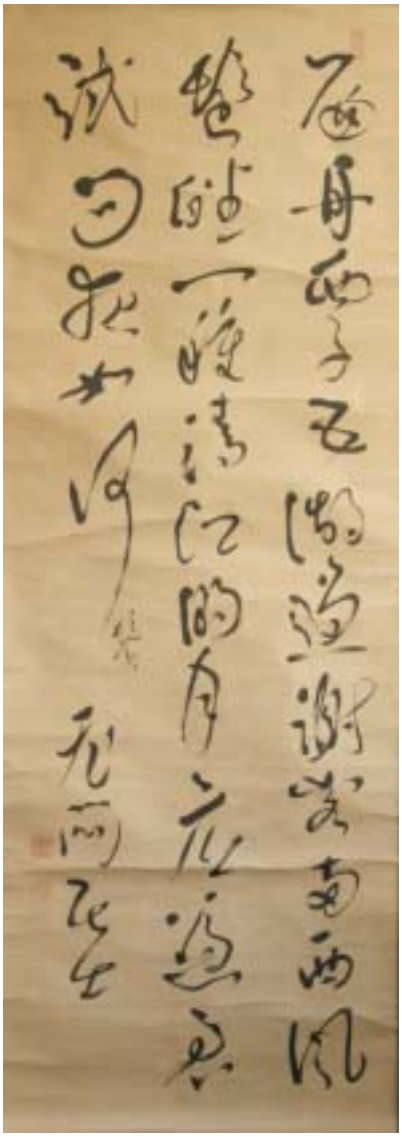
今回の展示では、公文書館所蔵資料ということもあって、唐様の書が中心になっていますが、その書体は、楷書・行書・草書などバラエティに富んだ配置になっています。

書を学ばれる方、市の歴史を学ばれる方、これらの著名人に関心のある方など、それぞれの目的や関心にあわせてお楽しみください。

久喜市長　田　中　暄　二

亀田鵬斎

かめだ　ほうさい　　一七五二―一八二六



扁舟西子五湖過謝客両西風
髣髴一種清江明月底憑君
試問夜如何（鬢）
無悶居士

初名は「翼」、後に「長興」、字は「穉龍」、通称は「文左衛門」、号は「鵬斎」、「善身堂」等を用いています。

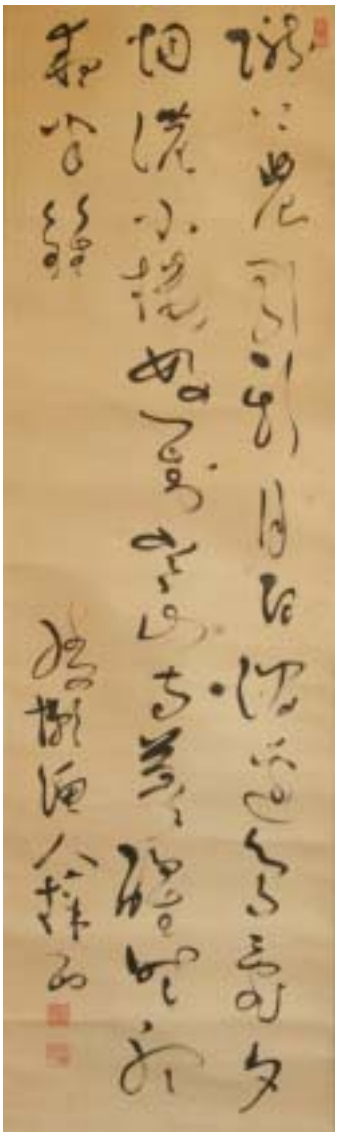
久喜の地では、郷学遷善館（せんぜんかん）が設立された際に、代官早川正紀（まさとし）に招かれて教授となり、講義を行ったことが知られています。

鵬斎の書は、鵬斎流（ほうさいりゅう）とも言われる草書が有名で、大酒飲みで反体制派というキャラクターともあいまって、当時、その書は、江戸っ子を中心に、地方でも大変人気がありました。

現在は、言葉がわからない海外でも、「ダンスを踊っているような自由な美しさがある」として人気を博すなど、国内・国外を問わず人気がある書です。

亀田綾瀬

かめだ　りょうらい　一七七八―一八五三



隴上農歌新月白澗邊鳥乱夕
烟濃小楼好対寒山寺夢醒時聴
夜半鐘

綾瀬漁人梓書

本名は「長梓」、字は「木王」、通称は「三蔵」、号は「綾瀬」、「学経堂」等を用いています。

父親の鵬斎同様、久喜の遷善館で講義を行ったことが知られています。

また、関宿藩（せきやどはん・現在の千葉県野田市）の藩儒でもありました。

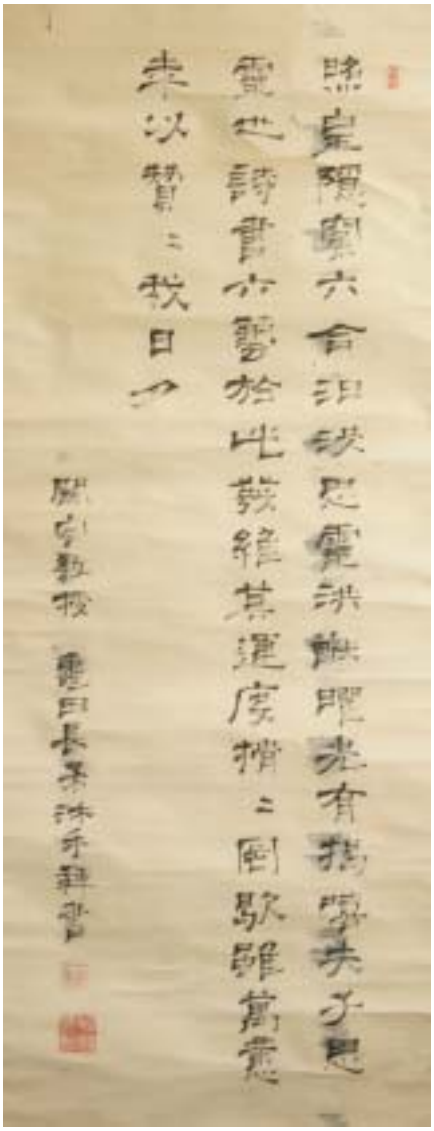
綾瀬の書は、楷書・草書ともに、父親の鵬斎に大変よく似ていて、鵬斎の最晩年には、身体が不自由になった父親に代わって、よく代作をしたといわれています。

あえて鵬斎と比べると、楷書では堅勁（けんけい）で筆先が躍動していることが、また、草書では技巧的で筆先が軽く、よく回転していることが、その特徴として指摘されています。

亀田鶯谷

かめだ　おうこく

一八〇七―一八八一



照皇隠窟六合汨没思霊洪猷曜光有揭嘻夫子思
霊也詩書六藝於此發維其運度搰々罔歇雖萬億
年以賛々我日月

関宿教授　亀田長呆沐手拝書

本姓は「鈴木氏」、初名は「毅」、後に「長保」、字は「申之」、通称は「保次郎」、晩年に「嚶彦」を用い、号は「鶯谷」、「学孔堂」等を用いています。

養父の綾瀬同様、関宿藩の藩儒となり、幕末の藩内では、佐幕派（さばくは）と対立しながら、尊王派（そんのうは）として活動しました。

鶯谷に学んだ中島竦之助は、その著『増訂亀田三先生伝實私記』（ぞうていかめださんせんせいでんじつしき）のなかで、鶯谷の書を、「能書にして、其の楷法は端荘にして、鵬翁晩年の書に似たり。文久以後、変じて隷となり、漢碑の類を磨す。ただ先生自ら言う。性、火の如しと。故に多く草字を作り、其の書牘（しょとく）のごとき、殆ど読むべからず」と評しています。

中島撫山

なかじま　ぶざん　　一八二九―一九一一

婦德不必才明絶異也婦言不必辯口利辭也婦容不必顔色美麗也婦功不必工巧過人
也清閑貞静守節整斎行己有恥動静有法是謂婦德擇辭而説不道悪語時然後言
不厭於人是謂婦言盥浣塵穢服飾鮮潔沐浴以時身不垢辱是謂婦容專心紡績
不好戲笑潔斎酒食以奉賓客是謂婦功此四者女人之大德而不可乏之者也然
為之甚易唯在存心耳古人有言仁遠乎哉我欲仁而仁斯至矣此之謂也

右曹大家班姫女誡婦行章語發明四行尤為詳蓋今撮録以示児婦松子

明治庚戌春三月　八十二翁　慶

本名は「慶太郎」、通称は「慶」、字は「伯章」、号は「撫山」、「佐知（致）麻呂」、「さちまろ」等を用いています。

亀田綾瀬・鶯谷に学んで亀田家の家学を継承する撫山の書は、やはり亀田三先生（鵬斎・綾瀬・鶯谷）の影響を色濃く受けています。

三先生の中でも、鶯谷の影響が特に強く、明治六年には、楷法から隷書に変じたことが伝わっています。

また、明治三六年（一九〇三年）に刊行された『明治畸人伝』（めいじきじんでん）という本の中では、撫山のことを「翁又書に巧みなり、其鵬斎流を今日に能くする者、けだし翁一人なるべし」と評しています。

撫山の撰文・書による石碑は、今でも、久喜市内又は久喜市周辺に、たくさん残されています。

中島竦之助

なかじま　しょうのすけ　　一八六一―一九四〇

女有四行一曰婦德二曰婦言三曰婦容四曰婦功夫云婦德不必才明絶異
也婦言不必辯口利辭也婦容不必顔色美麗也婦功不必工巧過人也
清閑貞静守節整斎行己有恥動静有法是謂婦德擇辭而説不道悪語
時然後言不厭於人是謂婦言盥浣塵穢服飾鮮潔沐浴以時身不垢辱是
謂婦容専心紡績不好戯笑潔斎酒食以奉賓客是謂婦功此四者女人
之大徳而不可乏之者也然為之甚易唯在存心耳古人有言仁遠乎哉我欲
仁而仁斯至矣此之謂也　曹大家女誡一節　七十四翁　中島竦録

字は「翹之」、通称は「竦」、名乗は「たかし」、号は「玉振」、「蠔山」等を用いています。

中島敦の小説『斗南先生』では、「お髭（ひげ）の伯父」として、弟の田人の書簡では「善隣（ぜんりん）の伯父」として、森鴎外の小説『羽鳥千尋（はとりちひろ）』では「中島蠔山（ごうざん）」として登場します。

竦之助の書は、父親の撫山の書に大変よく似ています。

また、竦之助の撰文や書による石碑は、今でも時折見かけることがあります。

なお、白岡駅前にある「新設白岡車站（しゃたん）之碑」は、「撫山中島慶撰并書」とありますが、当時の書簡等から竦之助の代撰・代書と思われます。

宮島詠士

みやじま　えいし　　一八六七―一九四三

竹帛煙銷帝業虚関河空鎖祖龍
居坑灰未冷山東乱劉項元来不讀
書
聽中島子之談有感　録古人之詩　詠士

諱は「吉美」、通称は「大八」、号は「詠士」を用いています。

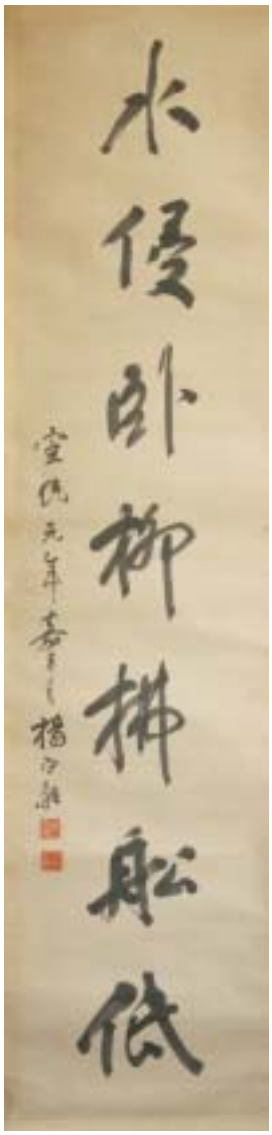
当代きっての中国通でありながら一切の官職を固辞し、善隣書院（ぜんりんしょいん）を設立して日中の架け橋となることを求め、書家と言われることを望まないなど、逸話の多い人で知られています。

中島家では、三男竦之助が善隣書院に寄寓して講義や研究をしたり、七男比多吉（ひたき）が詠士の追悼慰霊祭に際し雑誌に文を寄せたりするなど、浅からぬ縁がありました。

後に康有為によってその書が賞賛された張廉卿（ちょうれんけい）を師とする詠士の書は、ハライが長く、懐が狭く、筆速が早く、また、はなはだしい滲みが特徴で、石刻の風化等を意図的に表現しているといわれています。

楊守敬

よう しゅけい　　**一八三九―一九一五**



水侵臥柳拂船底
宣統元年嘉平月　楊守敬

字は「惺吾」、「星吾」、号は「隣蘇老人」を用いています。

明治一三年（一八八〇年）、初代駐日公使何如璋（かじょしょう）の招きで来日し、滞在中に中国古書の蒐集（しゅうしゅう）につとめ、『古逸叢書』（こいつそうしょ）を編さんしたほか、『日本訪書志』（にほんほうしょし）等も著しました。

守敬の書は、楷・草・篆・隷すべてに優れていたといわれています。

また、本人自らも「上海に帰り、仍（なお）翰臣（かんしん）の家に住み、又字を売る。其の時、守敬の字は声誉（せいよ）大いに起こり、書を求める者の踵（くびす）は門に接す。日に給するに暇（いとま）あらざれば、之を継ぐに夜を以ってす」と、当時、大変人気があったことを語っています。

康有為

こう　ゆういい

一八五八―一九二七

鵬礙九天須
遠避
中島比多吉君
康有為

初名は「祖詒」、字は「広厦」、号は「長素」、「更生」、「天游化人」、「南海先生」等を用いています。

日本の明治維新を参考にして変法自強運動（へんぽうじきょううんどう）を主導しましたが、戊戌（ぼじゅつ）の政変によって失敗に終わり、一八九八年（明治三一年）に日本に亡命をすることになる有為は、革新的な政治家として有名です。

その一方で、書への造詣も深く、中国書道史の名著といわれる『広芸舟双楫』（こうげいしゅうそうしゅう）を著したりもしています。

北魏（ほくぎ）の石刻文字に心酔した有為の書は、あたかも刷毛を使うように筆を引き回して、一気呵成に書きあげながら、そこに独特の奇趣が醸し出されることが、その特徴として指摘されています。

恭親王 溥偉

きょうしんのう　ふい　一八八〇―一九三六

我志未曽讓古人我材豈不如今人
間来欲向天公問何故生斯無用人
中島勿堂君遺詩庚午之夏録應
中島謙皆先生　雅命　　恭親王

本名は「愛新覚羅溥偉（あいしんかくらふい）」。

光緒帝（こうちょてい）の後継者候補の一人と目されていましたが、一九〇九年（明治四二年）に、醇（じゅん）親王家の溥儀（ふぎ）が宣統帝（せんとうてい）として即位すると、政治的には冷遇され、ほとんど活躍の場が与えられませんでした。

ただ、一九一一年（明治四四年）に辛亥革命（しんがいかくめい）が勃発し、袁世凱（えんせいがい）が宣統帝の退位を迫ったときは、粛親王善耆（ぜんき）とともに退位反対を主張して活動するものの、結局、一九一二年（明治四五年）に清朝は滅亡します。

この書は、一九三〇年（昭和五年）当時の恭親王の心情そのものだったのかもしれません。

粛親王 憲章

しゅくしんのう　けんしょう　　一八八五―一九五〇

是日也天朗氣清恵風
和暢仰觀宇宙之大俯察
品類之盛所以遊目騁懐
足以極視聽之娯信可楽
也

先厳粛忠親王遺墨撿贈
中島比多吉先生
粛親王憲章

本名は「愛新覚羅憲章（あいしんかくらけんしょう）」。

幼少のころから、父親の粛親王善耆によって、四書、五経、作詩、作文、書道、英語等の家庭教師がつけられ、なかでも作詩と書道を好んだと伝えられています。

しかし、残念ながら、病弱であったため、若くして家督を譲り、政治的には目立った活動はしていません。

お茶と読書と囲碁が好きで、特に碁に対する熱中ぶりは、かなりのものだったようです。

中島比多吉も碁では有名で、当時四段といわれた段祺瑞（だんきずい）と互角の勝負をしたと伝えられていますので、憲章と比多吉とは、碁敵（ごがたき）であったのかもしれません。

愛新覚羅溥傑

あいしんかくら　ふけつ

一九〇七―一九九四

樹影疑無
夏泉聲半
破雲　丁丑仲冬
中島先生正之
溥傑續併題

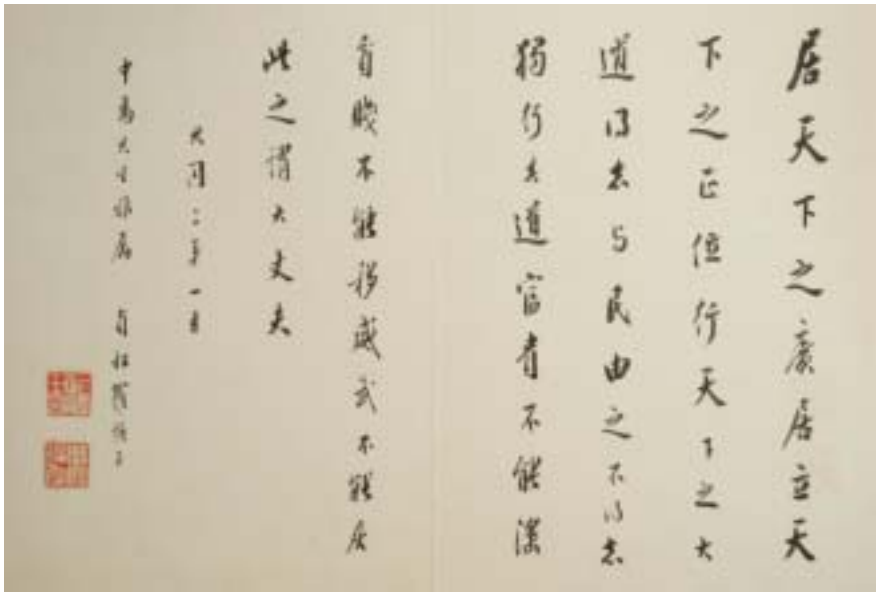
宣統帝溥儀の実弟として、溥儀同様、時代に翻弄される人生を歩みます。

溥傑は、自伝のなかで、「最初は描紅模子（赤色の手本を敷き、その上からなぞって書く）、模写（黒色の手本の上からなぞって書く）、跳格（模写をして、一字文あいている次のます目に同じ字を書く）、最後は臨帖（手習帳を手本に書く）をする」と、書を習った過程を具体的に述べています。

溥傑の書は、流水のような独特の書体で、当時から人気があったと伝えられ、溥傑自身は、自伝のなかで、欧陽詢（おうようじゅん）より褚遂良（ちょすいりょう）を好み、先生に反対されたものの、褚遂良の影響を強く受けた結果、今のような字体になったと語っています。

羅振玉

ら　しんぎょく　　一八六六―一九四〇



居天下之廣居立天
下之正位行天下之大
道得志与民由之不得志
独行其道富貴不能淫
貧賤不能移威武不能屈
此之謂大丈夫
　大同二年一月
中島先生雅属　貞松　羅振玉

字は「叔言」、「叔蘊」、号は「雪堂」、「貞松老人」、「松翁」等を用いています。

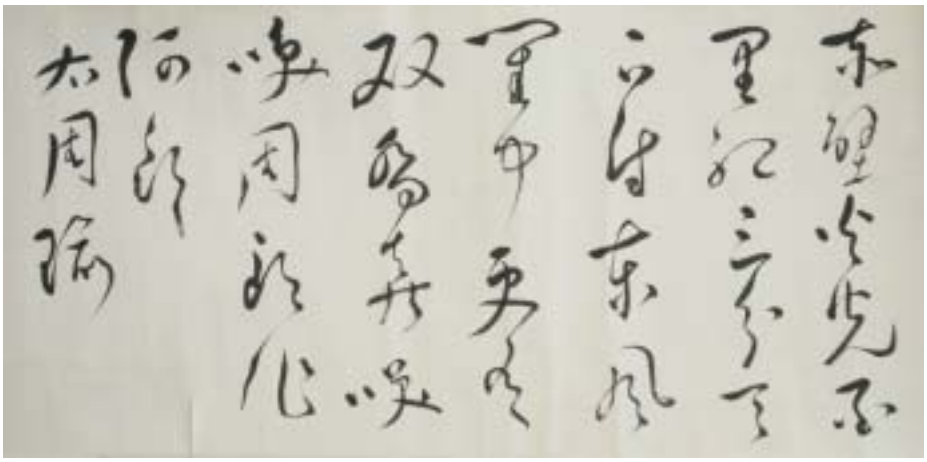
甲骨文字（こうこつもじ）の研究者でもある振玉は、みずからが発見したり、研究に関与したりした古代の文字遺産を、書作に移行したことで知られています。

また、宣統帝溥儀の師傅（しふ）としてその教育にあたるとともに、後に溥儀を擁立して満州国建国に参画するなどの政治的な一面もありました。

中島家では、二男端蔵の『斗南存稾』（となんそんこう）に振玉が序文を寄せていますし、三男竦之助は甲骨文字の研究者として振玉と同様の研究をしていましたし、七男比多吉もこの書にみられるように、浅からぬ縁がありました。

中島端蔵

なかじま　たんぞう　　一八五九―一九三〇



赤壁火光百
里紅三分天
下付東風
閨中更有
双喬喜咲
喚周郎作
阿郎
　右周瑜

字は「儼之」、通称は「端」、名乗は「まさし」、号は「斗南」、「勿堂」、「復堂」等を用いています。

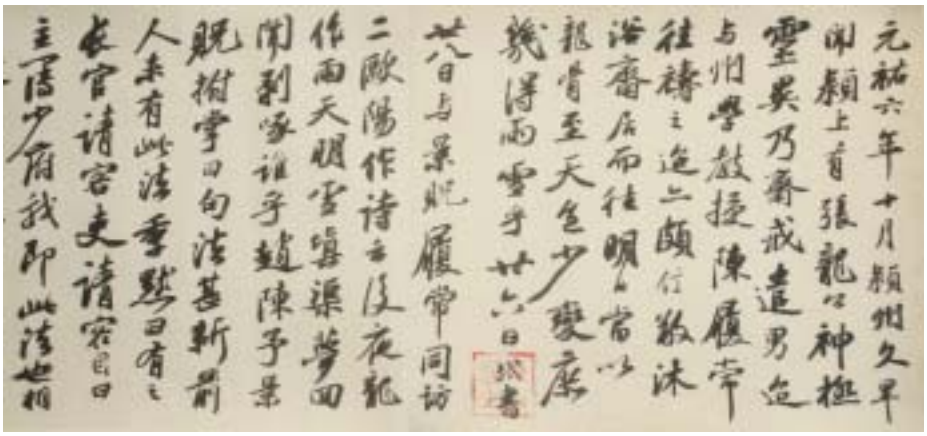
小説『斗南先生』の中心人物でもあり、小説のなかでは、甥や姪から「やかまの伯父」と呼ばれていた人物として登場します。

端蔵自身は、自分のことを悪詩悪筆といっていますが、詩については「中島斗南の詩力はもちろん明治二百五十家に入れても相当上位にいく」という指摘もあります。

ただ、詩文草稿の大半が紙魚（しみ）に食われたので全て火に投じたと『斗南存稾』の跋文にもあるように、自筆資料が多くはなく、また、現存するものも、草書で書かれているものは大変読みにくく、「性、火の如し」と自ら言う師鶯谷の影響があるのかもしれません。

蘇軾

そ　しょく　　一〇三六―一一〇一

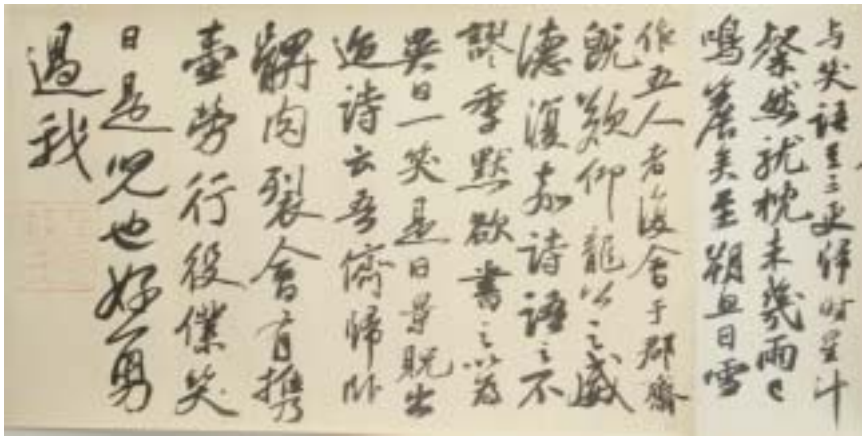


元祐六年十月潁州久旱
聞潁上有張龍公神極
靈異乃齋戒遣男迨
与州學教授陳履常
往禱之迨亦頗信敬沐
浴齋居而往明日當以
龍骨至天色少變庶
幾得雨雪乎　廿六日　軾書
廿八日与景貺履常同訪
二歐陽作詩云後夜龍
作雨天明雪填渠夢回
聞剥啄誰乎趙陳予景
貺拊掌曰句法甚新前
人未有此法季默曰有之
長官請客吏請客目曰
主簿少府我即此法也相

字は「子瞻」、号は「東坡居士」を用いています。

黄庭堅（こうていけん）・米芾（べいふつ）と並ぶ北宋の三大家の一人で、「書は立派な人物でなければ、いかに上手でも貴ばない」という言葉に見られるように、精神の尊重を強調した書家として知られています。

軾が書いた「黄州寒食詩巻」（こうしゅうかんしょくしかん）は、「書の中の書」といわれ、また軾の書は、「一字一字を見ると決して整った字形ではなく、しかしながら見る人に感銘を与えるのは、文字の大小、懸針ののび、疎密の変化、運筆のリズム、章法などの見事な構成によるものであり、中国第一級の文人としての、彼の人間性の高さによるところが大きい」と評されています。



与笑語至三更帰時星斗
粲然就枕未幾雨已
鳴簷矣至朔旦日雪
作五人者復會于郡齋
既歎仰龍公之威
德復嘉詩語之不
謬季默欲書之以為
異日一笑是日景貺出
迨詩云吾儕歸臥
髀肉裂會有携
壺勞行役僕笑
曰是児也好勇
過我

【参考】

『中国法書選四六　蘇軾集　宋』

大野修作解説より一部抜粋

（蘇東坡の書の）特徴はなめらかさ、自由闊達さにあり、その背景には、人間、自然との信頼関係があると思われる。彼は「書には必ず神・気・骨・肉・血がある。このうち一つを欠いても完成された書とはならないのである」というように、人間を基本にしながらも、その人間は、近世社会を背負って立つ、人格がすぐれた士大夫でなければならなかった。東坡の書はすぐれた人格が、複数の視点と柔軟な思考をもって自由闊達に展開してみせた軌跡ともいえるものである。

資料一覧

一　亀田鵬斎筆　七言絶句「謝処士載月図」
二　亀田鵬斎筆　「新建久喜遷善館記」（拓本）
三　亀田綾瀬筆　七言絶句
四　亀田鶯谷筆　「夫子賛」
五　亀田鶯谷筆　扁額「演孔堂」
六　亀田鶯谷筆　扁額「幸魂教舎」
七　中島撫山筆　二字書「駿聖」
八　中島撫山筆　二字書「楽聖」
九　中島撫山筆　扁額「明倫館」
一〇　中島撫山筆　扁額「不為言揚」
一一　中島撫山筆　『曹大家女誡』婦行章　一節
一二　中島竦之助筆　『曹大家女誡』婦行章　一節
一三　宮島詠士筆　七言絶句「焚書坑」
一四　宮島詠士筆　『曾文正公日記』巻上　問学　一節
一五　楊守敬筆　七字書「水侵臥柳払船底」
一六　康有為筆　七字書「鵬碧九天須遠避」
一七　恭親王溥偉筆　七言絶句「自嘲戯咏」
一八　肅親王憲章筆　「蘭亭叙」　一節
一九　愛新覚羅溥傑筆　五言対句
二〇　羅振玉筆　『孟子』滕文公章句　下　一節
二一　中島端蔵筆　七言絶句「周瑜」
二二　伝　蘇軾筆　「書潁州祈雨詩」（複製）

◎すべて当館所蔵の古文書で、その出所は次のとおりです。
（括弧内の算用数字は古文書群の中の資料№）

・中島元夫家古文書（整理中）　一、三～五、七、九～二二
・野原秋男家古文書　二（1）
・中島甲臣家古文書　六（1）
・社会教育課収集古文書　八（15）